

Yes / No 疑問文に対する応答の分析

広島大学大学院 築道 和 明

0 はじめに

学習者の口頭発表能力を養成する上で、英問英答は1つの有効な指導技術であると考えられるが、Palmer は疑問文に対する答えを 'laconic,' 'short,' 'long' の三者に分類し、問答練習においては 'short answer' (以下SA) を重視すべきであるとしている。

The answers (except in special cases) should not be unduly laconic nor unduly long. Thus the answer to a question such as "Is this my book?" should not be "Yes," nor "Yes, it is your book," but "Yes, it is." (Palmer & Palmer: 65)

また、McNair (1973: 28) も "The 'short answer' is the most natural and the most effective for class work." と述べ、答えのモデルとしてSAを指導することの必要性を強調している。

そこで、本研究では、このようなSAを重視した指導のあり方が妥当なものか否かに関して、次の2点から考察を加えることにする。

- (1) 日常のコミュニケーション場面で、SAがどのように用いられているか。
- (2) 学習者は、如何なる応答をしているか。

1 先行研究

Richards (1977) は、Yes / No 疑問文に対する答えを6つのタイプに分類し、話しことば、書きことば、教材の中にあられた応答を分析している。その結果、実際の言語使用においては、Yes / No を用いた直接的な応答よりも、むしろ間接的な応答(例えば、文脈から肯定、否定を推測するもの)が中心であるのに対し、教材では、SAが応答の大半を占めていたと述べている。

また、柳井(1980)は、英語専攻の大学生同士の対話を分析資料として、学習者の実際の応答を調査し、SAはほとんど使用されていなかったと報告している。

2 日常の言語使用にみられるSA

前述の第1の点を明らかにするため、以下の要領で分析を試みた。

(1) 分析資料

日常のコミュニケーションを反映していると仮定しうるNHKテレビ番組、「セサミ・ストリート」のテキスト1年分(1981年4月~1982年3月)を資料とする。

(2) 分析手順

資料の中にあられたYes / No 疑問文に対する答え、309例の中から、SA(9例)、SAに情報を付加したもの(18例)、Yes / No を用いずに疑問文中の動詞・助動詞を繰り返す答え方(20例)を選び出し、個々の応答に関して、対話者、場面などを考慮しながら、考察を加えた。

(3) 分析結果

わずか27例のみの資料では、早急に結論づけることはできないが、以下の例にみられるよう

に、SA に 'sure,' 'indeed,' 'not ~ at all,' といった intensive adverbs を付加して表現される傾向にあることから、1つの仮説として、話者が応答を肯定、否定のいずれかに強調しようとする際に、SA が好んで用いられるのではないかと想定できよう。

Q: Is it a butterfly?

A: *Oh no*, it's not a butterfly.

Q: Is this the dentist's office?

A: Yes, *indeed* it is. That's the dentist and we are her assistants.

Q: Hey, is that lovely noise a train coming?

A: Yeah, it *sure* is.

Q: Didn't that hurt?

A: No, it didn't hurt *at all*.

同様に、Yes/No を用いずに動詞・助動詞を繰り返す方に関しても、20例中、intensive adverbs の含まれている応答が11例あることから、答えを強調する上での1つの表現形式と考えられる。

Q: Are you the dentist?

A: I *sure* am.

Q: Do you have some nice potatoes?

A: I *sure* do. Just step this way.

Q: Do you know how a tricycle works?

A: *Sure* I do. Watch ...

以上の点から、結論として次のことが言えよう。即ち、Yes/No の有無にかかわらず、疑問文中の動詞・助動詞を繰り返す応答、例えば、“Are you the dentist?” に対して、“Yes, I am.” “I am.” といった答え方は日常会話において応答を強調する1つのストラテジーであると考えられる。次の例では、こうした2つの答え方が連続して用いられている。

Q: You like it?

A-Q: *I like it!* And you like it?

A: *Yes, I do.*

3 学習者の応答の分析

(1) 分析資料

学習者が実際の言語使用場面で如何なる応答をしているかを明らかにするため、NHK ラジオ番組「ハローフレンズ」の中での母国語話者と日本人学習者との電話による対話、合計27組を録音したものを資料として分析を行なった。尚、学習者の内訳は、中学生9名、高校生9名、その他9名（大学生2名、主婦2名、会社員5名）である。

(2) 分析手順

Richards (1977) を参考にして、Yes/No 疑問文に対する応答のタイプに関して、以下の5つの型を設定した。また、比較のため、中学校英語教科書の中にあられた答えも分析した。

さらに学習者のレベルによって応答の仕方に違いがあるか否かについても考察を加えた。

応答のタイプ

Class I :	Yes / No.
Class II :	Short Answer
Class III :	Yes / No + 追加情報
Class IV :	Short Answer + 追加情報
その他	

(3) 分析結果

分析結果を表1及び表2に示す。

表1 学習者の応答と教材との比較

	学習者の の応答	教科書の 中の応答
Class I	40 (32.79%)	6 (1.94%)
Class II	16 (13.12)	80 (25.89)
Class III	47 (38.52)	51 (16.50)
Class IV	2 (1.64)	154 (49.84)
その他	17 (13.93)	18 (5.83)

表2 学習者間の応答の比較

	中学生	高校生	その他
Class I	15 (38.46%)	18 (45.00%)	7 (16.27%)
Class II	6 (15.39)	6 (15.00)	4 (9.30)
Class III	9 (23.08)	13 (32.50)	25 (58.14)
Class IV	1 (2.56)	0 (0.00)	1 (2.34)
その他	8 (20.51)	3 (7.50)	6 (13.95)

表1から明らかなように、class II, class IV といった SA を用いた応答の使用頻度の上で、教材の中で重視されている答えのモデルと学習者の実際の応答との間に大きな差があることがわかる。

次に、学習者のレベルによる応答の違いに関しては、class I, class III について統計上の有意差がみられた。(class I に関しては $x^2=8.54$ $p<.02$, また、Class III については $x^2=10.98$ $p<.005$)。学習者の英語力と応答との関係については、今後さらに詳しく調査する必要があるが、今回の分析から学習者のレベルが上がるに従って Yes/No のみの応答から Yes/No に続けて何らかの情報を加える形の応答の使用頻度が高まるのではないかと予想される。

中学生の応答例

NS: So you want to be a narrator for animations?

JL: Yes.

NS: Are you practising at home right now?

JL: No.

主婦の応答例

NS: Do you have any children?

JL: Yes. *I have a baby boy. er... He was born on 24th of May this year.*

NS: Oh, he is brand-new!

JL: Yes, that's right.

*NS: native speaker of English

JL: Japanese learner of English

4 考察と課題

本研究で行った2つの分析から、次のことが結論として言えよう。

- (1) 日常の言語使用において、SAは応答を強調する際の1つのストラテジーと考えられるが、教材においては、SAが応答のモデルとして最も重要視されており、日常のコミュニケーションにおけるSAの基本的な機能が考慮されているとは言い難い。authenticityの観点からすれば、SAの指導は、SA使用の必然性が存在すると考えられる特定の場面、例えば応答を強調する場面などに限定されるべきであろう。
- (2) 本研究により、指導の中ではSAが重点的に扱われているが、学習者の実際の発話においては、SAは、ほとんど用いられていないことが明らかになった。別言すれば、SAを重視した指導が学習者の具体的な応答には、ほとんど影響を及ぼしていないと言えよう。
- (3) 次に、学習者のレベルにより応答のタイプに差があることも明らかになった。即ち、中、高校生では、Yes/Noのみの単純な応答が顕著であるのに対し、大学生、主婦、会社員などの応答では、class III、つまりYes/Noのあとに何らかの情報を付加した形の答え方が多用されていた。コミュニケーションを円滑に進めていくという観点からすれば、単なるYes/Noのみの応答よりもclass IIIをより重点的に指導する必要があるだろう。従って、学習段階の初期においては、Yes/Noのみの答え方を提示し、最終的な到達目標としては、class IIIを目指すべきではなかろうか。いずれにせよ、SAを重視した指導は、authenticityの観点からも、また学習の定着度といった点からも正当化しえないと言えよう。

本研究では、扱えきれなかった点も数多くあるが、特に今回はYes/No疑問文に対する応答のみに限定して考察したが、wh-疑問文に対する答えの分析も、今後は是非とも行う必要がある。また、学習者の実際の応答に関しても、SAの指導が充分になされていなかったために具体的な応答としてあらわれなかったのか、あるいは、日本語における応答のルールを直接的に英語使用に適用したために、Yes/Noのみの答えや、Yes/No+追加情報といった応答が顕著であったのか、今回の分析では明らかにすることができなかった。今後の課題としたい。

〔参考文献〕

- Churchill, L. (1978) *Questioning Strategies in Sociolinguistics*. Rowley, Mass.: Newbury House Publishers, Inc.
- Coulthard, M. (1977) *An Introduction to Discourse Analysis*. London: Longman Group Ltd.
- Goody, E.N. (ed.) (1979) *Questions and Politeness: Strategies in Social Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hatton, R.W. (1978) "On Asking Questions and Getting Answers," *FLA*, 11, 3, 265-269.
- 川尻武信 (1978) 「指導技術としての英問英答」『中国地区英語教育学会研究紀要』№8, 11-15.
- 土屋澄男 (1980) 「指導技術としての問答」『英語教育』大修館書店, 9月増刊号, 55-57.
- 柳井智彦 (1980) 「日本人による英語会話の談話分析」『中国地区英語教育学会研究紀要』№10, 79-82.
- McNair, J.M. (1973) "Putting the Question," *ML*, 54, 1, 27-31.
- Palmer, H.E. (1982) *The Oral Method of Teaching Languages*. Cambridge: W. Heffer Sons Ltd.
- and D. Palmer (1925, 1955) *English through Actions*. Tokyo: Kaitakusha.
- Richards, J.C. (1977) "Answers to Yes/No Questions," *ELTJ*, 31, 2, 136-141.